

公開講演会要旨

平城宮の井戸 発掘調査で知られた平城宮の井戸は約20基をかぞえる。井籠組構造の井戸枠が多いが、他に縦板組や曲物を用いるものもある。遺跡内における井戸の位置関係をみると、内裏のような大きな区画に伴う場合と一つの官衙区域のように比較的小さな区画に伴う場合とがある。官衙の井戸は、また正殿の正面や区画の中央に位置するものと、正殿の横や後あるいは区間の隅に位置するものに区別できる。前者では方1.8m以上の大型の井戸に限られ、官衙比定からすると官衙の業務と深く結びついていたようだ。後者では、方1.5mを最高に0.9mまでの各種があり、官衙の規模などと関係する。詳細は月刊文化財1976年4月号参照。(黒崎 直)

古代の測量術 奈良時代およびそれ以前に行なわれた測量の技術を、文献や発掘成果から類推しさらに実験を加え復元的に考察した。具体的な方法については、周髀算経、九章算経に記載された方法が実行されたことは疑いなく、円を描く為のコンパス、直角を出す3:4:5の原理なの実用化も行われていたことが推定される。測量に必要な道具は、上記のほかに表(8尺の棒)と間縄があり、これで、方位を決め地割を施していった。古墳・水路などの工事には、水平を出す道具もあったであろうが、それがどのようなものか決定的なことは言えない。図を作成するには、方眼を描いて、見取りをオフセットしていく方法が用いられている。条里の地割のあるところは、地割と図の方眼が一致し、かなり精度のよいものになっている。(木全敬蔵)

古代寺院の基壇 日本の瓦積基壇を、構造、成立時期、分布、どの建物に用いられているかなどについて検討してみると、成立の時期が7世紀後半初めに集中し、その契機が極めて一元的な要素をもつ。7世紀後半の例はすべて主要な建物に用いられ構造も企画的であるが、8世紀になると、周辺建物や補修に用いられる例が多くなる。これは、切石積基壇が段階的に発展し8世紀に入ると壇正積基壇として完成され、国分寺造営を契機に広がるのと対照的である。このことは基壇構築技術の伝播の背景にあるものを示唆している。瓦積基壇の成立についていえば、大津京の官寺である崇福寺や南滋賀廃寺の造営を契機に意図的に採用されたにもかかわらず、その主流としての位置が比較的短命であったことを示すのではなかろうか。(田辺征夫)

平城京と宮の園池 園池の水源は湧泉については山麓の一部に限られ大部分が河川によるため園池および園池を持つ邸宅が河川沿いに集中したものと考えられる。園池の形態は、山麓部については侵食谷、湿地を利用する形で、文献にみられる堤(塘)に関係するもので、平地部においては谷筋で旧河床や濠を利用する自然順応のものと、尾根筋で池を穿ものとの2つの形態がみられる。発掘事例でみられるように平地部の園池は、水源が浅い谷筋をもつ河川のため、多くの流量が期待できず、水深30cm未満の浅い池となる。また園池の意匠としては、岸辺が蛇行する形に州浜状に玉石や礫をゆるい勾配で敷きつめる形や、庭石の種類、配置などに共通点を持ち、建物が近接していることから観賞・遊宴に供用されたものと考えられる。(田中哲雄)